



ケネディの悲報を伝える前田特派員

みんなで語る民放史

題字 中川 順

今は「花の女子アナ」が話題の中心として週刊誌や写真週刊誌などで紹介されますが、平成13年秋から14年春にかけて「スポーツニッポン」近畿版の日曜日に連載された、『テレビの国OG・OB』という企画記事は、近畿各局のシニアの現役時代の活躍ぶりがうかがえるものでした。関西民放クラブの会報に紹介された中から7編を転載しました。

写真提供

MBS、YTV。

(各文末の年月日は掲載日)

私はこうして
ケネディ暗殺を伝えました

前田 治郎 (MBS)

私は昭和38年(1961)2月
からニューヨークに毎日放送の特派員として滞在していました。同年11

月22日、米国から日本に通信衛星

を使つてテレビ映像を伝送する実

験が政府間の取り決めによつて行

われた。広大な太平洋を越えてテ

レビの電波が果たして日本に届く

のか。通信技術の歴史上画期的な

日であった。

ところが当日、世界中を驚愕させた大事件が発生した。ケネディ大統領がテキサス州ダラス市内で凶弾に撃たれて死亡してしまったのである。出先でその事件を知つた私は、当時業務を提携していたアメリカABC放送の国際部門のオフィスに駆けつけた。日本にリポートする材料を集めるためであ

る。そのうちにスタッフの1人、ジエイコブ氏が私に言つた。「今日は通信衛星の実験の日、1回目は成功したがもう1回実験が可能だ。それは午後7時から15分間だ。君がここにいるのだから、この電波に乗せて日本語でこの大事件のニュースを日本に送つたらどうか?」思いがけないことで、自信はなかつたが考へている場合ではない。「わかった。やります」と答えた。

それからが大変、刻々と時間が迫る。15分間もリポートできる材料はそろつていらない。原稿を作る余裕もない。緊張で心臓は高鳴るばかりだ。しかし、私を支えてくれたのは、アナウンサーとしての経験であつた。始まれば何とかなるだろうと開き直つた。「落ちついで」と言い聞かせながらスタート。事件発生の模様、容疑者が逮捕されたこと、テレビの歴史上記念すべき日にこのようなニュースを送ることはまことに残念であることなど、目の前のテレビを見ながらまたそばに座つたABCのスタッフが渡してくれるメモを見ながら何とか15分を乗り切つた。

初めての衛星中継ということであ

おそらく日本の全テレビ局が待ち構えていたところに、このショッキングなニュースが飛び込んできたのだが、偶然にもそのリポートを担当した私にとっては終生忘れることのない強烈な思い出である。

(平成13・11・4)

エノケンとの競演は幻に

故 松下 煌 (ABC)

大阪の民間放送が始まって50年になる。私は昭和26年のABCラジオの開局から約25年、ラジオとテレビの番組プロデューサーとして主にドラマを担当した。長い年月にはいろいろなことがあり、多種多様なタレントと付き合った。

今をときめく扇千景参議院議長とも、その昔ラジオドラマで一瞬のご縁があった。昭和31年だったと思う。正月企画として「百万円」をテーマにしたラジオドラマを作ることになった。ちょうどその時、梅田コマ劇場に「日本の喜劇王」エノケンさんが出演しておられた。私はエノケンさんを主役にラジオミュージカルを考えた。当時のエノケンさんといえば、まさに飛ぶ鳥を落と

す勢いだった。私はコマ劇場に先生を訪ね、礼を尽くしてご出演を乞うたのでOKとなつた。

脚本は宝塚の舞台演出家の、今

恋が消えていく…というチャップリンばりのストーリーだった。「この少女、誰がいい?」とたずねると、T氏は「うち(宝塚)の若手女優でいいのがいる。ぜひ起用したい」と熱心に勧めた。

その若手女優が扇千景さんだったのです。

(平成13・11・18)

“難産”から生まれる高視聴率

内海 佑治 (KTV)

稽古は、エノケンさんの宿泊先の梅田の旅館の一室で、夜、コマの舞台が終わってから始まつた。

T氏に連れられて扇さんがやつて來た。美人とは聞いていたが、噂に違ひはなかつた。それと、本当に「借りてきた猫」のようにおとなしく、恐縮いつぱいで消え入るような声で「扇千景でございます。よろしくお願ひ致します」と頭を下げたのが印象的だつた。しかし、この「エノケン・扇千景主演」という企画は日の目を見なかつた。

翌日、宝塚の学校事務局から

出演は許可しません」というきついクレームが出て、結局、この役は別の女優さんになつてしまつた。

40数年前の扇参議院議長のエビソードである。扇さんは覚えているだろうか…。

あのおどおどして部屋に入つてきた、初々しい彼女ことは今も鮮明に記憶に残る。

歳月は大きくなるを変える、といつたら失礼だろうか…。

(平成13・11・18)

私の経験では高視聴率の番組は難産が多かつた。ゴルデンタイムで當時20%以上、時には30%を超えた『どてらい男』は、はじめ予定していた番組がフジの企画に似ているとかで制作直前につぶれ、慌てて新しくつくりかえたのに、今度はスポンサーの逆鱗にふれて半年以上もオクラ入り。がフ

タをあけてみると3年6カ月18回の超ロングランとなつた。

森繁久弥、吉永小百合の『吉田

茂』は娘の目を通して戦後昭和史を描いたものであつたが、大臣を65人もつくつた超ワンマンの愛娘は麻生和子さん(麻生太郎の母)。

この人に気に入られようと田中角栄はじめ代議士がむらがつたというだけあって、田中真紀子も比ではない威厳があつた。

ある日突然彼女から電話があつた。吉田の『愛人』小りんを脚本からはずせという。小りんの存在は公然の秘密であり、しかも山田五十鈴の予定。今さらなぜかとムツとすると「昭和天皇がご覧になることになつたからとにかく消せ」。彼女には随分振り回されたが、この3時間ドラマ、29・2%もあつた。

『船場』43・9%、大阪国際マラソン45・3%にも何かと問題は起つたが、綱渡りの連続は85年阪神タイガース優勝決定戦をおいてない。9月11日59勝40敗でM22が点灯した時、70勝が山場とみて、フジ、KTVの放送権を調べると、神宮での10月16日からの対ヤクルトナイター3連戦がこれにあたつ

た。直ちに深夜放送でもと編成部に申し入れるが一蹴。

9月30日にはM8となり、よ

うやく編成も本気になつてフジが全国放送を打診するが拒否される。膠着状態がつづいた。10月9

日M6。ついに巻幡編成局長が関西地区だけでもやると決断。これに押されてフジも胴上げだけは放送することに。

いよいよ10月16日M1。がこの日のデーゲーム巨人—広島戦で、

広島が負けると自動的に阪神優勝で放送の意味はなくなる。しかし広島が勝ち、怖いような熱気のもと試合は始まつた。放送は関西だけのはずだつたが、抗議の嵐は各地に沸きあがり、結局全国にネットされた。

56・7%という公式戦中継最高視聴率(瞬間最大74・6%)となつたのである。(平成13・11・25)

エネルギッシュだった

新喜劇演者たち

山口 洋司(YTV)

『親バカ子バカ』『とんま天狗』など大阪発のスタジオ・コメディが全国に旋風を巻き起こそうとしていた一番活気のある昭和35年4

月に入社した。

念願の制作部に入ることができ、アシスタントとして最初の仕事は大阪・天下茶屋にあつた渋谷天外宅へ『親バカ子バカ』の原稿をとりにいくことであつた。何しろ天外さんはその日の夜収録する原稿を朝書いているのである。7~8枚ずつできたのを何度も往復して持ち帰り、その生原稿にディレクターがカメラ割をして、待機している印刷屋さんに渡す。台本が出来上がるのが夜も遅くなつてからで、ちょうどその頃中座の夜の芝居を終えた出演者たちがスタジオに入つてくる。



『親バカ子バカ』の一場面 渋谷天外、藤山寛美

2度の簡単なりハーサルの中でみなせりふを覚え、最後のカメラ台本を放して進める。まさに離業に思えたが新喜劇の人達は当然のことのように2本撮りを終えて夜も白む頃、また楽屋に帰つていののであった。

そんな中で番組の人気は上がり、藤山寛美というスターが生まれたわけだが、その寛美だけはリハーサルのときから違つていた。

スタジオのモニターを自分の見ついているのかをセリフを覚えることとそつちのけでまず頭に入れる。

「あのね、もしもし、僕ね！」あ

の独特の言い回しをしながら、アップの時、2ショットのときは、などとカメラのサイズに合わせて自在に芝居を組み立て、それは舞台とまるで違つた新しいメディアであるテレビの特性を面白がつて取り込んでいるようであった。

寛美の人気に乗じて読売テレビでは寛美主演の『しゃつくり寛太』をさらに制作。これは寛太が横山エンタツや南都雄二、エノケン、森光子らと丁々発止で掛け合いを

する読み切り時代劇。当時は舞台に出ている演者の都合で徹夜に近

い収録は当たり前であつたが、これも終了は夜中の3時頃。終わると、ここが寛美らしいところであるが、きれいどころに酒肴(しゆ

こう)をいっぱい運ばせてあり、スタジオ前のロビーはきまつて大宴会、掃除のおばさんがやつてくる頃やつとお開きになるのである。

寛美ら演者のバイタリティー、エネルギーにあおられながらディレクターになることだけを気持ちの支えにしていた日々のことである。

(平成13・12・3)

ゴンドラが上がりず収録中止に

金子 俊彦 (MBS)

毎日放送は、平成13年、創立50周年を迎えた。半世紀に及ぶこの間、視聴者の皆さんから高いご支持を頂いた番組は数多いが『アッブダウンクイズ』もその一つであった。

昭和38年10月から同60年10月まで22年間、放送回数1084回を重ねたこの番組はその間の関西での平均視聴率が21・6%という人気番組だった。

私はこの半分近い期間をデイレ

クターとして担当する幸運に恵まれた。

長寿番組だつただけに、この間の番組にまつわるエピソードには事欠かないが、そのホンの一端を紹介したい。

大関に昇進した直後の輪島関(後の54代横綱)に回答者として出場してもらつた時のことである。どんな問題だつたか忘れたが、答えが「江戸」の問題に輪島関が真っ先にボタンを押した。すかさず司会の小池アナウンサーが「輪島さん、どうぞ!」とうながすと、輪島関は「えーと、えーと」と口ごもつた。おそらく早とちりで回答ボタンを押してしまつたものだろ。ところが小池アナのほうが

「えーと」を「江戸」と聞き間違えて「江戸!はい正解!」と叫んでしまつた。そしてゴンドラはなにごともなかつたように一段上に上がつたのである。

大相撲の高嶋親方(現役時のし

こ名は三根山・平成元年没)に出演してもらった時は笑つてすまされる話ではなかつた。180キロの重さまでは大丈夫なはずのゴンドラがどういうわけか、親方の乗つたゴンドラだけが本番前のリハーサル



『アップダウンクイズ』このゴンドラが上がらなかった!

こかにあるはずである。2代目のゴンドラは先ごろ150万円かけて修繕され、平成13年9月に放送されたMBS50周年記念番組に使われた。
(平成13・12・16)

土曜の正午に23年君臨

『ノックは無用!』

築 典雄 (KTV)

『ノックは無用!』は関西テレビを代表するバラエティ番組であった。1997年9月27日、11

54回を以って終了したが、23年間に及ぶ長寿番組でもあった。この間、横山ノック、上岡龍太郎の両司会者は変わることなく、生放送を務め上げた。参議院議員のノックは、国会会期中や立候補公示の1ヵ月間、番組から離れることはあったが、上岡は一度も休まなかつた。

この番組の企画が出た頃、テレビ界はビジュアル面を追い求めていたので、人の顔と話だけではテレビになりえないと反対された。ゴンドラの2人乗りが可能になつた。

年配の視聴者の皆さんにはじみ深い初代ゴンドラは、その後香港の映画に使われ、今も香港のど

場、1ヵ月24人、年間300人と出会うこの番組は担当者の大きな財産になつた。新人ディレクターは何らかの形でこの番組のスタッフになり、その後、他の番組へと移つていつた。

10年が過ぎる頃「偉大なマンネリズム」を自負してきた。新しい担当者は内容や展開を変えようとしがちになる。一切それをさせず、ゲストとの出演交渉に全精力を注ぐ努力をさせた。1154回セツトの似顔絵以外、番組当初のままで貫いた。ゲストが時代を背負つて登場し、「今」を語つてくれるこ

とで、常に新鮮さを保つことができたのであつた。

1000回を迎えた時、ノックが知事になつた。地方自治体の長には休暇がなかつた。ノックの出演に対し議会が反対し、マスコミは好意的ではなかつた。テレビで「馬鹿」をやる暇があるなら公務に専念せよ、新人知事はもつと勉強せ

